

第5回 死の欲動と涅槃原則

重元寛人

いよいよ、**死の欲動**である。この概念は、フロイトの後期の理論で登場し、当時から賛否両論をまきおこした。

この概念が登場した、記念碑的な論文が『快感原則の彼岸』（1920）である。この論文、まことに重要な論文らしく、いろんな人が珍重して引用している。そのありがたみを十分理解できているかどうかは自信がないが、これがフロイトの著作の中でも際だって変わった論文であることはわかる。その特徴を列挙してみよう。

- (1) 非常に難解な論文である。
- (2) 単に人間の心理学ということを超えて、非常に広範な問題を取り扱っている。（欲動理論を単細胞生物も含むすべての生物にあてはめようとしたり、地球上に生命がどのように生じ進化してきたかといった問題をあつかったりしている）
- (3) 精神分析以外の多くの学問をも根拠に論をすすめている（ゾウリムシの増殖に関する生物学の所見、ダーウィンの進化論、プラトンが『饗宴』でアリストフォネスに語らせた神話など）。
- (4) 空想的で、ついていけないような所がいくつもある。
- (5) 哲学的な思想がもりこまれているようだ（カントやショーペンハウアーも登場）。
- (6) もし結論が本当だとすると生きているのがいやになってしまう。（フロイト自身が「わたし自身はこれを感じていないし、人にも感じてもらいたいと考えているわけではない」と書いている、そんな論文なのだ。）

このように、フロイトの著作とわからなければ荒唐無稽なものとして一笑にふされてしまったのではないかとも思えるような代物なのだ。

では、その要点を整理しながらみていこう。ご存じのように、それまでのフロイト理論では（例えば『精神現象における二原則についての定式』1911年など）、精神現象をとらえるのに、以下のような対立をよく用いた。

快感原則 対 現実原則

精神装置は、その内部に生じる快感をなるべく多く、不快感をなるべく少なくするように働く。これが**快感原則**。

しかし、ただやみくもに快感を追求していたのでは、現実に対応できず、結果的に多くの不快をまねくことになりかねない。そのために、現実をみてよく判断し、時には一時的に不快を耐えしのぎ、快感をおあずけにすることも必要になる。これが**現実原則**。

現実原則は、時に快感原則に対立するが、それは根本的なものではない。それは、最終的に大きな快感を得るための、かきこい戦略にすぎないからである。だから、**現実原則**というのは**快感原則を一部修正したもの**にすぎず、結局のところ心を支配しているのは広い意味での快感原則である。精神装置とは、ひたすら快感を追求しているだけのものだ。ちよっと脳天気にも思えるが、これがこれまでのフロイトの考えかた。

さあ、ここからが新たな問題提起。どうやら、このような考え方ではうまく説明できない現象があるみたいなのだ。その例として、この論文では以下の4つがあげられている

- (1) 外傷神経症（今でいう心的外傷後ストレス障害：PTSD）の患者が、病気の原因になった驚愕体験を、繰り返し夢にみてうなされること。
- (2) ある1歳半の子供の遊びについての観察。
- (3) 神経症患者の精神分析治療においてよくみられるパターン。医者・患者の転移関係の中で、患者の過去の苦痛な体験が繰り返し繰り返し演じられること。
- (4) 他者との人間関係がいつも同じ結末に終わる人がいる。例えば、「庇護した相手に去られて、恨みを抱く慈善家」「どんな人と友人関係を結んでも、最後に裏切られる人々」「ある人を自分や世間にとっての大きな権威として祭り上げながら、しばらくするとこの権威を自ら崩し、別の権威を祭り上げることを繰り返す人々」「女性との愛情関係が、つねに同じ経過をたどって、同じ結末に終わる人々」など。

このうち、(2)の逸話は非常に有名なものなので、少し長くなるが引用しよう。それは、1歳半まで問題なく発育した、お行儀のよい男の子である。（実は、これはフロイトの娘ゾフィーの息子エルンスト、すなわち彼の孫であった。）

しかしこの行儀のよい子供が時折、困った癖をみせ始めた。自分の手にしたおもちゃなどの小物を、部屋の隅やベッドの下などに放り投げるのである。このため、放り投げられたおもちゃを探し出すのが一苦勞であった。そしてこの子は、小物を投げると、興味と満足の表情とともに、長くのばしたオーオーオーオーという音を立てた。この子を観察していた母親とわたしは、この音が間投詞ではなく、「いない（フォールト）」を意味することで意見が一致した。ついにわたしは、これが子供にとって一つの遊技であることに気づいた。子供は自分のおもちゃを「いないいない」遊びに利用していたのである。ある日わたしは、このことを裏づける観察を行うことができた。子供は、細紐を巻き付けた木製の糸巻きを手にしてた。しかしこの子は、糸巻きを床に転がして引っ張って歩く<車ごっこ

>をすることは思いつかないようだった。子供は細紐の端を持って、布を掛けたベッド越しに巧みに糸巻きを投げ込んだのである。糸巻きが姿を消すと、子供は意味ありげなオーオーオーを言い、それから紐を引っ張って糸巻きをベッドから取り出すと、いかにも満足そうに、「いた（ター）」という言葉で糸巻きを迎えた。これは姿を消すことと姿を現すことで成立する一組の遊戯だったのであり、それまではわれわれは、姿を消す場面ばかりを目撃していたのである。この「姿を消す」動作はそれだけで、遊戯として倦むことなく繰り返されたが、「姿を現す」動作の方が大きな快感を伴ったのは明らかである。

こうしてこの遊戯の意味が解明できるようになった。この子の躰の良さと関連があったのである。この子が、母親が「いないいない」になることを逆らわずに受け入れ、欲動放棄（欲動の充足の放棄）を成し遂げたのは、この躰の良さによるものであった。子供は自分の手にすることができるもので、母親が「いないいない」と「いた」になることを自分で演出していたのであり、これで、欲動の放棄が償われていたのである。この遊戯の情緒的な性格を評価するにあたっては、この子がこの遊戯を自分で発見したのか、それとも何かに暗示されて習得したのかは、問題ではない。われわれが関心を持つのは、別の問題である。母親が「いないいない」になることは、子供にとって快適なものであったはずはないし、どうでもよいことでもなかったはずである。それでは子供が自分にとって苦痛な経験を遊戯として繰り返すことは、快感原則とどのように一致するのであろうか。あるいは、「いないいない」になることは、母親が再び姿を現すという喜ばしい経験のために必要な条件として演じられたので、母親が姿を現すことを再現するのが、この遊戯の本来の意図であったと説明できるかもしれない。しかしこの説明は、「いないいない」という最初の場面が、それだけで遊戯として演じられていたこと、しかも喜びに満ちた結末をもたらす「いた」の場面よりも、はるかに頻繁に演じられたという観察に矛盾する。

（『快感原則の彼岸』ちくま学術文庫）

エルンスト君が、母親がいなくなる場面の遊戯を何度も繰り返したのはなぜか。フロイトは2つの仮説を考えている。

- (1) もとになった体験では、エルンスト君は母親が去る場面を受動的に体験させられた。彼は、それを遊戯の中で再現する際には、自分が能動的に母親を去らせるという立場に立てる。ここに喜びがある（支配欲動）。
- (2) 日頃は抑圧されている、母親に対する<復讐衝動>があらわれて、「お母さんなんか、いなくなっちゃえ」という遊びになる。

しかし、これらだけでは、どうもしっくりこない。まだなにかあるのではないか。たとえ快感原則に合わなくても、不快な体験を繰り返す理由が……。

そこで、上に挙げた他の3つの例もあわせて眺めてみると、そこには共通のパターンがある。「苦痛な体験にもかかわらず何度も何度も強迫的に繰り返す」というパターンが。

このような強迫を、「**反復強迫**」と呼ぶ。

「快感原則の彼岸」には反復強迫があるらしい。人間の心には、たとえそれが苦痛なことでも反復する傾向があるらしい。

それまでの理論にとっては革命的な考え方だ。しかし、これだけでは、従来の理論に合わない現象に「反復強迫」という新しい名前をつけただけであり、問題提起にすぎない。どんな時に反復強迫がおこるのか。それが快感原則にあてはまらないなら、どんな原則にあてはまるのか。それを明らかにしなくてはならない。

この先（本文の4章以降）のフロイトの説明はきわめてむずかしい。だから、途中を省略して結論だけを述べることにする。

反復強迫は、単に快感原則の例外ということではなく、むしろ欲動の基本的な性格であり、快感原則よりももっと根元的なものであるという。

欲動とは、生命ある有機体に内在する強迫であり、早期の状態を反復しようとするものである。（『快感原則の彼岸』）

そして、生命にとっての早期の状態をつきつめていくと、生命のない状態すなわち死ということになる。だから生命体の目標は死である。死をめざす欲動＝死の欲動こそもっとも基本的な欲動である。これが結論。

一方、それまでの欲動理論では、性欲動と自我欲動の対立が基本であった。しかし、自我欲動はナルシズムの段階までさかのぼれば性欲動と区別がつかず、結局両者の区別は根本的なものではないということになる。そこで、性欲動と自我欲動を合わせて、広い意味での性（生）の欲動とし、これを死の欲動と対立させるのが後期の欲動理論である。

欲動についての新しい対立

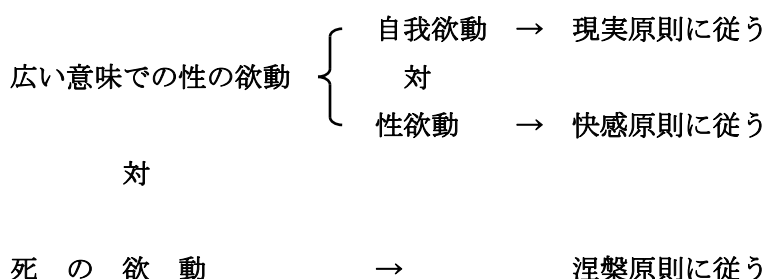
性（生）の欲動 対 死の欲動

死の欲動は、生体とその固有の死へと歩ませる。性の欲動は、それに逆らい、攪乱し、興奮させる。死の欲動は静かで目立たないが、性の欲動は騒々しい。

快感原則は、性の欲動についての原則であった。快感原則を越えた新しい原則は、涅槃原則と呼ばれる。それは、快感原則を超越すると同時に、快感原則をもうちに含む、より普遍的な原則である。

涅槃原則とは、心の中にある生についての攪乱・興奮を放出し、しずめ、均一化して、より刺激の少ない静穏な状態をもたらそうとするものである。

おおざっぱにまとめると、次のようになる。



ここまでが、『快感原則の彼岸』で展開されている、死の欲動についての理論の要旨（と
思う）。しかし、どうも雲をつかむようでぴんと来ないというのが実感。

同じ話題についてその3年後の『自我とエス』でも論じているが、ややニュアンスが違
っていて、こちらの方が少しだけ具体的にイメージしやすい（といってもわかりにくいこ
とには違いない）。以後は『自我とエス』の論旨にそって説明する。

エロス（性欲動） 対 死の欲動

こう書くとエロスと死の欲動が喧嘩をしているようだが、その対立ははっきりとは外に
見えないものである。純粋なエロス、純粋な死の欲動というのはあまりわれわれの目には
とまらず、欲動としてとらえやすいのは二つの混合物である。

例えば、性欲の中にはエロスの要素とサディズム的要素が不可分に混ざりあっ
ている。相手をいたわり、情愛のこもった関係を望むという部分と、相手を支配し自分の思
うままにしたい、もっといえばいじめたいという部分がある。性欲は、エロスと死の欲動
がある比率で混合したものである。

逆に、他者に対する攻撃衝動の中にもエロスのものというのは混ざっている。これも
また、エロスと死の欲動の混合物である。性欲とはその混合の割合が違うが。

死の欲動は、もしそれが純粋な形で現れた時にはきわめて危険なものである。だからそ
の危険性を減らすために、**欲動の混合**がおこり、エロスによってその危険性が中和される。
逆に混合した欲動から、エロスの要素がぬきとられると（**欲動の解離**）、非常に危険な欲
動になる。その代表がサディズム。

このような二種類の欲動の混合を想定するならば、これらの欲動の----多かれ少なかれ
完全な----解離の可能性も否定できなくなる。性欲動のサディズム的要素は、目的に適
った欲動の<混合>の実例であり、それが独立して倒錯としてのサディズムとなった場合
は、<解離>の典型と考えることができる。

（中略）

これを簡単に一般化してみると、リビドーの退行の本質、たとえば性器期からサディズム肛門期への退行の本質は欲動の解離にあると考えられる。これに対して初期の段階から最終的な性器期に発展するには、エロスの要素が加わる必要があるであろう。さらに、神経症の素質においてはアンビヴァレンツが強化されている場合が多いが、これは解離の結果として把握できるのではないかという疑問が生じてくる。しかしこのアンビヴァレンツは非常に根元的なものであり、完全に欲動混合が行われなかったことによると考えるべきであろう。(『自我とエス』)

ここでの言い方を見ると、次のようにまとめてもいいのではないかと思う。

欲動の混合 = 安全で適応的な欲動への変化

例：性欲動のサディズム的な要素
前性器期から性器期への発達)

欲動の解離 = 危険で不適応をまねきがちなる欲動への変化

例：倒錯としてのサディズム
性器期からサディズム肛門期への退行)

さて、ここで4章の最後で保留にしていた問題にもどることにする。つまり、超自我が自我に対してふるう強力な支配力は、どこからくるのかという問題である。そこには、上記の「欲動の解離」が関係している。

超自我は父のモデルとの同一視によって生じたものである。こうした同一視は、脱性化という性格と昇華という性格を備えている。こうした変化が発生する際には欲動の解離も同時に発生すると想定することができる。昇華の後では、エロスの要素は、そこに含まれる破壊性を拘束する力を失ってしまうので、破壊性は攻撃傾向または破壊傾向として解放される。この解離のために自我理想は「……せよ」と命令する<当為>となり、苛酷で残忍な特徴をおびることになるのである。(『自我とエス』)

ちょっと以外に思えるのは、「昇華」についてのここでの扱いである。昇華といえば、性欲にたいする防衛機制の中では一番望ましいもののようなイメージがある。が、それは同時に非常に危険な要素を含んでいるようだ。

超自我は、昇華の性格を備えており、自我にとって苛酷で残忍な特徴をおびている。それが、いきすぎて病気といえるほどにまで現実適応に支障をきたした状態が、うつ(メランコリー)であり、強迫神経症であるという。

メランコリーにおいては以下のような事態がおこっている。

過度なまでに強い超自我は、個人の中であらんかぎりのサディズムを発揮するかのようである。サディズムの理論によると、破壊的な要素が超自我の中に沈殿し、自我に向けて使用されるかのようである。いまや超自我の中で支配しているのは、純粹培養された死の欲動である。自我があらかじめ躁病にかかることによって暴君から自分を防衛していない場合には、この超自我が実際に自我を死に追いやることに成功する場合も多いのである。
（『自我とエス』）

一方、強迫神経症においても、強い罪悪感はその病理の中心にあることは、『強迫神経症の一症例に関する考察（1909）』（俗に言う「ねずみ男」の症例）などでもすでに強調されてきたことだ。しかし、強迫神経症の場合には、メランコリーのときとは違って、自我を圧倒し滅ぼそうとするまでにはいたらない。その理由について、フロイトは「自我が安全に守られているのは、対象が保持されているからだと思われる（『自我とエス』）」と言っているがいまひとつよくわからない。ともかく、強迫神経症においては、自我を圧倒しようとする残忍な超自我に対して、あの手この手を使って（様々な防衛機制を使って）抵抗しようとし、その結果が不可解な強迫観念や強迫行為であるようだ。